

論文

## 観光と地域住民の世帯戦略

— インドネシア・バリの事例から —

小滝 麻理\*

### 1. はじめに

観光は20世紀を通じて巨大な産業に成長し、多くの途上国は外貨獲得の手段を観光に求め、経済開発のための観光の重要性が増している。

地域住民の観光への関わり方は、観光の規模やタイプに規定される。またその一方、地域住民の意志決定や選択は、当該地域の観光の雇用構造を形成していく要素となる。その個々人の選択行動は、性別、年齢、結婚、教育、エスニシティなどの社会的要素により方向付けられると考えられ、観光という文脈のみの考察では、地域住民の選択行動を明らかにすることは難しい。地域住民の観光への関わりを、観光を含めた当該地域の政治経済や社会状況を把握した上で捉えることが必要となる。

観光研究は、観光関連活動における経済的、社会／文化的、環境的影響に関する研究の蓄積を持つ一方で、体系的な観光研究の不足も指摘されている [Cohen 1999]。ホスト社会の地域住民の観光への参入の状況に関しては、全ての地域住民が等しく観光に参入するわけではなく、その形態の多様性に対して、誰がいかなる理由でどのように参入するのかを決定する要因

を分析する必要性が指摘されている [Stonza 2001]。

その地域住民の取り組みを把握する上で、必要なファクターの一つとして採用されるようになったのがジェンダーである。観光研究のなかで、ジェンダーへの関心が高まりを見せ始めたのは1980年代後半から90年代である [Kinnaird et al. 1994; Norris 1994; Swain 1995; Sinclair 1997; Apostolopoulos et al. 2001; 石森&安福 2003; etc.]。観光セックスワーカーに関する研究、ゲスト社会における旅行への動機と女性のライフサイクルの関連、ホスト社会でのジェンダー役割に関する研究など、多様な観光研究の側面で、ジェンダー研究はポジションを得てきたといえよう。

特に、ホスト社会に対する観光の影響について、ジェンダー研究は、往々にして女性に目を向け、ホスト社会の観光の過程を分析し、ホスト社会の権力関係やジェンダーが、雇用や意思決定にいかんにか反映するかを議論してきた [Swain 1995]。そこでは、観光は女性に新たな現金収入の機会を提供し、家庭や地域において女性のエンパワメントを実現してきたという議論、一方で、新たな現金収入の機会があっ

\* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程2年

でも家庭での義務は減るわけではなく、むしろ重荷が増しているのではないかという議論がある。また、観光商品のイメージとして利用される女性の性、そのイメージとも関わる観光雇用の構造に対する批判的検討などがある。観光の構造化が、既存の社会的規範の強化を促進し、女性の地位が観光開発の結果として、高められているのではなくむしろ、低く抑えつけられているという主張もある。

このような観光とジェンダーをめぐる諸議論は、男性と女性で観光への関わり方が異なることも指摘するなど [Kinnaird et al. 1994]、一定の成果を挙げてきている。これらの研究は、当該地域の包括的な社会経済的側面のなかで、観光を論じることの契機となり得ることは認められる。

しかし一方で、このような、観光の雇用構造が既存の社会的規範に根ざしているとする立場においては、女性が積極的に観光と関わりを持ち、観光の雇用構造を形成する原動力となる可能性を見落とす結果ともなりかねない。女性は、自らの現状を把握し対応する行為者として捉えられるべきであり、その上で一方の男性との関係を論じる必要がある。女性は、観光への参入に際して、実生活における役割と観光への従事に柔軟に対応している機会が少なくない。このような多様な参入を形成している状況を、ジェンダー・アプローチだけで捉えるのは不十分なのではなからうか。

そこで、本稿では、インドネシア共和国バリを取り上げ、所与の状況下で、個人がいかに関光に関わるのか、観光とジェンダーをめぐる議論を踏まえ世帯内部の動態から論じ、観光と地域住民との関わりをめぐる諸議論に対して、地

域住民の世帯戦略という視点から考察を付け加えるものである。そこでまず、バリの観光や社会生活の特徴を概観し、バリの宗教と家族生活がいかに関り立っているのかを述べる。その上で、観光の仕事と家族生活との関連を考察する。観光産業に携わる地域住民が、日常生活の中心である宗教活動と現金収入の機会である観光の仕事とに対して、どのような意識を持っているか、双方の両立をいかに行っているのかを示し、世帯戦略という視点から考察する。

## 2. バリの文化観光

国際的観光地としての名声を得ているバリの観光開発は、1960年代より国家主導の下で推進され、外部からの投資を呼び込み、フォーマル／インフォーマル、性別を問わず雇用機会を創出してきた。1969年の第一次五ヵ年開発計画において、国際観光が経済開発の重要なツールの一つとして位置づけられ、バリはインドネシア随一の国際観光地として、その中心的舞台へと踊り出た。1969年にングラライ (Ngurah Rai) 国際空港が開港したのを境に、観光者数は急速に上昇した。1969年には11,000人ほどであった観光者数は、1989年には66万人に増大し、2000年には140万人以上にも膨れ上がった。また、スターランクホテル数は、1989年には29数であったが、2000年には113数、ノンスターランクホテルの小規模のアコモデーションは、1989年には812数であったが、2000年には1255数と増大しているように、現在では、国際基準のホテルのみならず、大小のアコモデーションがひしめいている<sup>(1)</sup>。このような急速な観光開発の過程で、バリの労働市場も急速に拡大してきたのである。地域住民は、観光者の多様なニーズ

に応える結果として、小規模経営のホームステイや格安のアコモデーションなどを展開し、多様な取り組みを行なってきた。

またバリは、「365日何処かで儀礼が行われている」といわれるほど、宗教活動が日常の中心である。人々の生活の重要な一部分である宗教活動は、人々の参入に際しての選択材料に密接な要素であり、一方その文化的要素を観光文化に昇華させてきた観光開発のあり方とも関連がある。そこで、まずバリの文化観光についてふれておこう。

バリの観光化の歴史は、オランダ植民地時代の1920年代に始まる。植民地政府は、伝統文化の「文化保護政策」を推進する政策を掲げ、ヒンドゥー教を社会の基盤としてみなし、バリの統治体制をとった。[永淵 1996, 1998]。伝統文化とは、かつてジャワで滅びたヒンドゥー世界を保持するバリのことである。「生きた博物館」としてのバリの文化保護は、「バリのバリ化」をもたらし、その政策方針は、その後観光に引き継がれる形となったといえよう。

1930年代は「バリ・ルネッサンス」と賞されるほどの芸術の発展期であった。新たな「伝統」として幅広く変容を遂げた「バリ・ルネッサンス」は、特に欧米人との接触により引き出されたという性格が強い<sup>(2)</sup>。この性格は、現在のバリのイメージにも大きく影響を残している。バリを訪れる欧米人との交流のなかで、現在のバリを彩る芸術が発展し、そのような伝統文化のあり方が、欧米のみならずバリ内部にも流通していったのである。植民地時代に生成されたバリのイメージは、インドネシア共和国独立後も、受け継がれることとなる。

バリ州政府は、バリにおけるマストურიズム

の到来に対し、いかに講じるか検討してきており、1971年には「バリにおける文化観光のあり方に関するセミナー」を開き、「文化観光 (Pariwisata Budaya)」という観光開発の指針を発表した [鏡味 2000]<sup>(3)</sup>。文化観光は「ヒンドゥー教の精神によって基礎づけられ、インドネシアの国民文化の一部分を構成し、最も大きな可能性を持ったものとしてのバリ州の地方文化を、その発展と開発において、観光と文化が互いに結びつき、その結果両者が適切に、また調和とバランスを保って向上するようなかたちで、利用するタイプの観光」と定義される [山下 1997]。つまり、上述の指針は、バリの生活文化そのものを観光資源として位置づけ、この資源を観光に利用すると同時に、観光をバリの発展に寄与させるという主張を持つものである。このようにして、バリの文化は観光との共存によって形成されてきたという部分がある。例えば、観光者のために作られた演目が神々へ奉納する儀礼の演目として使用される機会も出てきている。このような観光の発展に伴う「バリ化」の過程において、バリ人は観光者の求める「バリ人」を意識し、自文化への意識が高まったと指摘される [Picard 1996, 永淵 1998, 中村 1990]。観光が文化の昇華に巧みに利用されてきたのと同時に、観光も人々の生活文化に浸透していったのである。

また、州政府による慣習振興政策においては、バリ＝ヒンドゥー教徒の生活の基盤が慣習村にあると捉えている。これは、開発が進む現代において、バリの文化を堅持する基盤を慣習村に置くという理念を持っている。つまり、慣習に基づいた伝統的組織を、外来文化からの悪影響に歯止めをかけ、観光や地域開発への地域

住民の参加の促進に貢献するものとして位置づけている<sup>(4)</sup>。このように、「伝統文化」と称されるバリの社会生活の基盤は、従来の慣習に基づきながらも、観光や慣習に関する州政府の政策とも不可分である。地域住民は、観光の恩恵に与りながら、慣習の実践を両立させている。観光による恩恵と慣習との折り合いは、人々の観光への関わり方の問題でもある。そこで、バリの社会生活を、宗教と慣習という両者が密接な要素を中心として述べ、慣習に基づきながら、現代的現象である観光に関わる地域住民のあり方へを述べたい。

### 3. バリの社会生活

#### (1) 慣習組織

バリ州は8県から成り、各県のもとには郡、その郡のもとには行政村 (Desa Dinas)・慣習村 (Desa Adat) というように細分される。また、慣習村は「一組の慣習的取り決めと共有のヒンドゥー寺院を核とする、地域住民の自治的まとまり」として捉えられるように [鏡味 2000]、行政区分とはみなされていない。また、行政村と慣習村は完全に一致するわけではなく、2つのシステムが重なり合い共存している。ただし、人々の日常生活は、慣習村や慣習組織における活動が基盤となっている。

慣習村は、複数、または単一のバンジャール (Banjar) という集落から形成される。バンジャールの成員資格は各バンジャールにより多少異なるものの、大抵結婚した一組の夫婦が単位として成員資格を得る。バンジャールの寄り合いに出席するのは男性であり、ここでの意見形成は男性によってなされる。一方の女性は、寄り合いには出席することはなく、夫や父親を

通じて意見形成に関わることになる。理念的には、夫はとして世帯主の役割 (Kepala Keluarga) を担い、一方の妻は家庭を守る役割 (Ibu Rumah Tangga) として、家庭を守る役割を担うとされている。

バンジャール単位で執り行う協同作業、儀礼等での労働分担、モノや資金の提供は、この夫婦が単位として義務づけられる。この義務が何らかの理由によって履行されない場合は、基本的に罰則が課せられる。昨今は、観光産業に代表されるような固定的な就労時間によって、慣習組織の活動に参加できない者もいる。その場合は、現金支払いによる解決や代替的な労役分担によって解決されることもある。

私的な儀礼としての通過儀礼や葬送儀礼などは、慣習的な紐帯による相互扶助が前提として行なわれる。「バンジャール内のどこかの家で死者が出ると、他の成員はすぐに駆けつけ、儀礼のためのさまざまな準備を手伝い、物質的援助もする。援助を受けた当事者の方は、協力してくれたバンジャールの仲間に食べ物や飲み物を寛大に振舞って労をねぎらうことになっている」とされる [中谷 2001]。

また、人々は多様な慣習的な社会組織に属している。水利組織 (Subak)、ボランティア集団 (Seke) や信徒集団、青年団などといった多様な慣習的な組織が、バリの経済、社会を維持する上で重要な役割を持っている。組織の成員は重複することはあっても、完全に一致することはない。現在では、このような慣習組織の活動は多岐に渡っている<sup>(5)</sup>。

このように、相互扶助の精神によって成り立つ慣習組織の活動は、バリの人々にとって生活の基盤なのである。現在、人々の活動は、慣習

村などの慣習組織の枠を越えて広がっているが、依然としてバリの人々にとって、慣習組織に結びついた社会関係は、親族関係と同様に重要なのである。

## (2) バリ＝ヒンドゥー教

インドネシア共和国の総人口のうち、その大半をイスラム教徒が占めるのであるが、そのようなイスラム教国家のなかにあつて、バリ州の人口のほぼ90%がヒンドゥー教徒である。特にバリにおけるヒンドゥー教は、バリ＝ヒンドゥー教と呼ばれる。バリにヒンドゥー教が伝来する以前から信仰された、呪術や祖先崇拜がヒンドゥー教に融合しており、独自性を持ち合わせている<sup>(6)</sup>。バリにおけるカースト制度は、貴族層のブラーフマナ、サトリア、ウェシアを総称してトリワンサ（内なる人）と呼び、平民層のスードラをジャバ（外なる人）と呼び峻別している。そのうち、スードラが人口の90%を占める。最高司祭になることはブラーフマナにしか許されていないが、ブラーフマナを除けば、特定の職業と結びついているわけではなく、緩やかなカーストといわれる。また経済的ヒエラルキーとは直結しておらず、経済的に豊かな平民層も大勢いるが、日常生活では、言葉遣い、会合などにおける座る位置の関係などによって、明瞭にカーストが表現される。

またバリ＝ヒンドゥー教は、多種多様な儀礼に彩られていることで知られている。バリにおける儀礼はパンチャ・ヤドニヤ（Panca-Yadnya）という5つの儀礼に分類される<sup>(7)</sup>。バリでは、日常的に多種多様な儀礼が行なわれている。例えば、神々の儀礼として行なわれるオダランという寺院の創設記念祭は、バリにある全

ての寺院で執り行われる<sup>(8)</sup>。慣習村共同で祀る寺院や、屋敷地にある家族のための寺院など規模も異なるものの、バリの人々は誰もが、それぞれが関わる寺院全ての創設記念祭を支える義務を持つのである。またガルガン・クニンガンという祖霊神を迎える儀礼は、日本のお盆のようなものにあたり、その準備はさらなる時間と労力をかけて行なう。これら宗教的義務は、慣習的な紐帯をもとに行なわれる。観光ガイドブックなどで、「365日何処かで儀礼が行なわれている…」、「神々の島…」と形容されるのも理解されよう。

## (3) 家族生活

バリにおいて結婚は、「駆け落ち婚（グロロド Ngrorod）」が一般的な婚姻形態であるといわれる<sup>(9)</sup>。女性は結婚後、夫の父系出自集団（ダディア、ソロハン、リンティハンなどといわれる共通の先祖を祀る出自集団）に属することになる。バンジャール内の相互扶助によって執り行われる葬送儀礼を除いて、一連の通過儀礼は、基本的にダディアの相互扶助によって行なわれる。新婚夫婦は、夫の家族の屋敷地内に住むか、あるいは屋敷地内に既に空間的余裕がない場合には、その近くに新居を建てるといわれる。その新居には、新たに屋敷地内の寺院（サンガーもしくはムラジャン）を建立しなければならない。その新居は夫の家族の住居と儀礼的紐帯を持つ。

屋敷は、一つ以上の世帯（Kuren）とサンガーもしくはムラジャンによって構成される。バリにおける世帯は、「結婚した夫婦と、その夫婦に依存して家計を共有する構成員」により構成されており〔中谷 1997, 2003〕、地理的空

間としての居住単位であるだけでなく、宗教活動の単位でもあり、大抵家族のつながりを通じて形成され、家計を共有する。世帯は、日々の生計を共にする経済生活のつながりだけではなく、宗教的紐帯を持っており、その紐帯を中心に行なわれる儀礼活動は、バリの日常生活に欠かせない。同一の屋敷地に住む複数の世帯とも、子育てや家事、宗教的義務の一部で協同関係を持っている。宗教的義務の実践や種類の協同作業といった義務の実践により、世帯間関係の紐帯は強固に規定される。このように、バリの人々はいかなる形であろうと個人の属する世帯と密接な関わりを持っているため、バリにおける世帯とは、個人の生活空間としての基盤であるといえよう<sup>40</sup>。

バリ人の社会的基盤である慣習組織の諸活動は、世帯を基盤として再生産されるのであり、世帯はそれらの活動の最小単位として位置づけられる。世帯の再生産は世帯間の相互扶助の上に成立しており、儀礼は厳格な交換関係によって成立することから、個々の世帯は独立して存在することはできない。世帯の経済的／社会的再生産は、日常の社会的行為により結び付けられた親族関係や社会関係の経済的／社会的再生産をも意味するのである。このように宗教的義務は慣習的なつながりの一環でもあり、慣習的なつながりで行なわれる社会的再生産の重要な要素なのである。

#### 4. 観光の仕事と家族生活

##### (1) 観光の仕事に対する意識

これまで見てきたように、バリにおいては社会生活の再生産が宗教活動と不可分であるため、人々の観光への参入もこれら宗教的義務と

の折り合いが加味されることは容易に想定されるであろう。観光が発展するにつれて観光関連の労働人口が増え<sup>41</sup>、人々は経済成長の恩恵に与ってきた。人々が観光へ参入する理由として、まず既存の生業と比べて効率よく現金収入がのぞめることが挙げられる。従来指摘されているように、また多くの途上国が開発手段として観光を採用していることから明らかなように、開発の規模やタイプに左右されるにしても観光がもたらす経済的利益は大きい。観光産業内部でも多様性がみられるものの、農業や漁業に比べると画然とした格差が生じている。観光開発の初期段階においては、専門性が求められる仕事、フォーマルセクターの大半の仕事は、外国人や地域住民以外が占めていた。これらの仕事を行なうのに必要な専門的な技術が地域住民にはなかったからである。しかし、当該地域の観光が熟していけば、さらなるトレーニングが促進され、地域住民が高いレベルの仕事を取り戻すことができるようになる。また、観光産業に就くには、語学などの高い技術や訓練が必要であるために、地域住民は観光関連の仕事から締め出されると従来は考えられていたが、技術や訓練の経験がなくとも、インフォーマルな活動が行なわれている。

現金収入の機会としての観光の重要性が増してきたものの、上述したように人々は儀礼活動などに生活の中心を置いており、バリにおいて社会生活を成り立たせる要素は、経済的再生産のみではなく、儀礼活動や慣習組織の活動を通じての社会的再生産も含んでいる。そのため、職業選択に際しても、それら社会的要素を看過することはできない。では、地域住民は、観光産業の様々な仕事に対して、いかなる意識を

持っているのであろうか。そこで、実際に職業選択がいかに行なわれるのかを見てみたい。

ここではCukierによる調査データから観光の仕事に対する意識を探ってみたい。Cukierは、バリ南部のクタ及びサヌールというバリを代表する観光地において、観光に関連する代表的な仕事を4つ取り上げ、聞き取り調査を行なった[Cukier 1996]。それは、①スターランクホテルのフロントデスク（以下フロントデスク）、②観光者相手のドライバー及びガイド（以下ガイド）、③土産物を販売する小規模商店の販売（以下ショップ）、そして④ビーチや通りにいる露店商人（以下ベンダー）の4つの仕事である<sup>12</sup>。

これらの観光の仕事に対する意識に関して、観光の仕事に対する選好は、ホテルを頂点として階層化されている。Cukierの調査からは、フロントデスクの仕事は、他の3つのカテゴリーと比べても、それほど経済的利益が大きいわけではないことが示される。それにもかかわらず、人々はフロントデスクの仕事を選好及び羨望する傾向にある。経済的利益とは相関関係がなく、仕事のprestigeが階層化されていることが窺え、経済合理性のみでは量れない意識が存在している。ホテルを頂点とした当該地域の観光産業の構造が、地域住民の仕事に対する意識に反映していることが窺える。総じて、人々は観光の仕事に対して好ましい反応を示しており、ホテルの従業員の間では、仕事の選択においては自己の向上を目指すという理由も多くみられる。ホテルやレストランでの接客に関わる仕事について、「観光者とのコミュニケーションの機会があるため、自分の仕事が好きである」と答えている者も多い[Cukier 1996]。

ここでは、観光者の存在も大きな要素であるといえよう。またベンダーは、フロントデスクよりも高収入を示しているにも関わらず、経済的利益とは裏腹にフロントデスクの仕事を目指す者もあり、仕事のprestigeは収入だけで量れない。女性の場合は特に、観光者の存在が観光への関わりを大きく左右していることが認められる。ライセンスを取得しているガイドは、1990年には1350人であったが、そのうち女性は100人に過ぎない[Long & Kindon 1997]。バリ社会において、女性が外国人観光者と接することを好ましく思わない地域社会の制約があることが、その理由として指摘できる。

次に重要なことは、観光の仕事に対するprestigeが生成される様子が、性別によって異なる順序を表していることである。性別を問わず、ホテルの仕事が羨望的であることは変わりないものの、ホテルの仕事の次に続く、人々に好ましいと受け止められている仕事は、性別により異なる。ホテルの仕事に続いて、男性はガイドの仕事を、女性はショップの仕事を好ましいと受け止めている。また、特に女性の場合、既婚者にとって望ましいと考えられる仕事は、一定してショップを指向している。ショップは大抵、小規模家族経営の形態をとっているため、家族や親族、知人のつながりを中心として雇用される。そのため、儀礼や家事、子育ての都合で、仕事に支障が出る際には、相互扶助が柔軟に可能なのである。

このように、仕事の選好における相違は、性別によって家族生活や宗教活動への貢献の仕方が異なることと関連がある。世帯のなかで、性別により宗教的義務や家事への関わり方、義務の量が異なり、また社会的規範も異なるかたち

で作用している。既婚女性にとっての仕事のプレステージには、家族生活との兼ね合いが可能なことが重要な要素となっている。ホテルの仕事が羨望を集める一方で、ショップの仕事は、経済的側面のみならず、社会的側面においても、宗教的義務、家事や子育てといった要素を加味した上での世帯維持に効率的である。このために、結婚後はショップなどに移ったほうがよいと考えられており、生計維持のための戦略として把握することが可能といえよう。

## (2) バリにおける女性の職業選択

バリにおいて、儀礼活動は日常生活を成立させる重要な要素であることは、既に述べた。これら多種多様な儀礼の準備に捧げる労力は、並々ならぬものである。儀礼の準備で最も労力を費やすのが、供物の制作である。観光ガイドブックには、大きな供物を頭に乘せて歩く女性の姿が度々登場するように、バリのイメージを形成する一つの要素ともいえる。供物の制作は、その大半を専ら女性が担い、特に世帯主の妻は、主導的な役割を担う〔中谷 1997〕。女性は毎日欠かすことなく、あらゆる建物に一日3度の供物を捧げる。この日課に加えて、多様な儀礼に応じて大小さまざまな供物を制作する。その数やタイプの組み合わせは膨大なものである。各儀礼に応じた供物の種類、数の計算や作業の必要時間などは、細部に渡って世帯や親族関係の女性たちによって教えられ、受け継がれる。規模の大きな儀礼になると、女性は何週間も前から朝から晩まで儀礼の準備に追われることとなる。一方の男性の仕事は、大きな飾りつけなどの力仕事、及び儀礼用の調理などである。オダランやガランガン、クニンガンなどの

大規模の儀礼においては、男性の仕事は重要であるものの、日々必要な供物に関する義務から解放されているために、女性のそれに比べるとその労力は少ないといえよう。

このように、観光の仕事に対する意識には、宗教活動との関連が窺える。男性は、日々欠かせない供物制作の義務を負っておらず、家事も女性の領域と考えられてきた。女性の観光への参入によって家事を男性が行なうことも増えてきたが、補助的なものであるといえよう。そのため仕事に対する意識も、宗教的義務や家事との両立を考慮することはほとんどない。むしろ男性は、家計を支える大黒柱となるよう社会的に求められているといえよう。

バリにおいて、観光の発展により急速に労働市場が開けてきたことは確かであり、女性の経済活動の枠も広がっている。新たな現金収入の機会として、観光は魅力ある仕事として定着し、多種多様な従事の仕方がみられるようになり、バリの社会生活に合致した柔軟性もみられる。地域住民の経済状況は改善されてきたとはいえ、生計維持のためには慣習組織などの従来の活動のみに関わるばかりではいられず、現金収入の機会にアクセスしようとする者は決して少なくない。世帯の日々の生活を支える上で、女性の経済活動は重要であり、家事や宗教的義務と生計という双方の活動が織りなすことで、男性と異なる活動がうまれてきた<sup>13)</sup>。このように、女性の経済活動は、家事や宗教的義務、生計の維持という要素により規定されるところが大きいのである。

既婚女性は、日常的な儀礼の領域で主導的な役割を担うため、世帯の経済的／社会的再生産に不可欠な宗教的義務や家事と仕事との融通性



や、時間利用に関して利点が多いことが判断材料として大きな要素となっている。女性の経済活動と宗教的義務は不可分であり、既婚女性はこれらの義務との兼ね合いを重視し、その上で観光での現金収入とのコンビネーションを織りなしているように、依然その重要性は高い。

一方、未婚女性の観光への関わりは、あらゆる義務から形式的には解放されているため、個人的嗜好や経済的利益が重視される。ただし、宗教的義務や家事といった世帯の社会的再生産に関しても（母親などの）補助的役割を持ち、実際には世帯維持に対する貢献は大きいと受け止められる。家計を共有するため世帯の経済的再生産への貢献もある。未婚者のなかには、家計を助けるほどに収入を得ているわけではない者もいるが [Norris 1994]、家計への貢献があまりないとしても、一人分の生活費が計上されるだけでも家計の負担は軽減される。未婚女性が仕事に対する選択材料として、世帯維持との兼ね合いを検討するのは稀であり、既婚女性よりも仕事の選択の幅が広い。逆に言えばこのことは、女性は結婚後、家庭に収まるのが、社会的規範のなかである程度求められていることが窺える。

## 5. 世帯戦略からみる観光との関わり

### (1) 観光とジェンダー、世帯維持

以上のように、バリの女性の場合は、既婚／未婚によって意思決定や選択に幅がある。既婚女性は、観光との関わりの中かで家族生活の再生産を目指しており、世帯維持との兼ね合いが容易である仕事を優先的に選択する傾向にある。女性の選択行動に関して、世帯維持や子育てとの兼ね合いが女性の意志決定や選択に関わ

ることは、従来から議論の蓄積があり、改めて指摘するまでもないかもしれないが、ここで重要なことは、バリにおける女性の観光への関わりは、世帯における役割の比重によって多様性を持つということである。世帯内部の経済的／社会的再生産における女性の役割とは、男性も含めた構成員の間でいかに分担するか、その関係において規定されるのではなからうか。

つまり、バリの女性の観光への関わりを把握するには、既婚／未婚という要素だけではなく、構成員数など世帯の規模、経済状況などを包括的に捉える必要があると考えられるのである。世帯の経済的余裕がない場合、女性が「一家の大黒柱」としての役割を担う場合がある。Norris は、ホテルで働くことで、家計を支える主たる役割を担う既婚女性の経済活動を報告している [Norris 1994]。この世帯では、彼女以外が農業従事者であり、現金収入が不安定である。ホテルへの就業という選択は、家計を維持するという経済的理由に拠るのであり、彼女は、ジェンダー役割を超えた世帯維持に必要な経済活動を行なっている。ここで、この既婚女性の世帯における第一の役割は、世帯の経済的再生産として位置づけられ、家事は他の構成員に分担されていることが窺える。男性は、家事や供物を制作するなどの日常的な義務を持たないので、このような義務を分担するのは女性の構成員である。世帯の構成員のなかに複数の女性がいる場合、既婚女性の行為は、他の女性の仕事や家事への貢献と、相互依存関係であることが予測される。宗教的義務が課せられる単位は夫婦であるが、実際にその義務、つまり供物の制作、儀礼のホストへの訪問などは、家族の構成員のなかでも、特に女性たちで

分担されるからである。このように、既婚者も未婚者も相互依存的に世帯を維持しており、両者の役割は相補的である。

また、女性同士のつながりのみならず、男性との関係も女性の選択行動を左右する。男性の選択行動には世帯維持との兼ね合いが見受けられないのは、一般に男性は家計を支える主たる役割を担うべきだと考えられているからである。男性が経済的に十分な収入がある場合には、女性は外で働くことは少ない。世帯の経済的再生産の役割が男性に充足される場合は、女性は世帯の社会的再生産の役割に徹する傾向が窺え、明確なジェンダー分業も見受けられる。また、夫の意見が自分の仕事の仕方を左右すると考える女性も多々いる。ここでは、確かに社会的規範が窺える。

## (2) 世帯戦略

上述のように、社会的規範に沿った選択行動も見受けられるように、社会的規範は女性の観光への関わりにおける要素の一つであるといえよう。しかしながら、そのような意見を持つ女性と、そうではない女性との状況の相違が見受けられる。それは、各世帯の経済状況によって、社会的規範を意識する態度に多様性があることを意味する。経済的余裕がある場合とそうでない場合では、女性の仕事に対する意味づけは全く異なり、男性が家計を支え、女性は家庭を守るという関係のみでは割り切れず、ジェンダー役割に応じて女性の経済活動が規定されると考えるだけでは不十分である。男性は世帯の経済的再生産の側面を支え、女性は世帯の社会的再生産の側面を担うという図式では当てはまらず、従来論じられてきたバリのジェンダー関

係には還元しきれない。女性が家計を支える第一の役割を持つ世帯も見受けられる場合があるのは、社会的規範以上に世帯の経済的再生産という理由が、女性の選択行動を形成する要素となっているからなのである。

世帯は、観光従事者と観光従事者に依存する構成員、及び観光以外の収入を得ている構成員が共存している空間である。世帯内部で、多様な現金収入源を持っているか否かによって、家計の観光への依存度が変化する。観光従事者の現金収入は、他の生業から比べると非常に高いので、個人の世帯における役割は、観光に携わることで変容するといえる。前述したように、他の構成員が従来の生業に携わっている場合、女性は家庭を守るという役割ではなく、経済的に世帯を支える役割を担う場合もあるのである。このように、世帯の経済的／社会的再生産をいかに行なうのかという点が、女性の職業選択を方向づける要素となっており、このような世帯戦略は世帯内部の構成員同士の関係のなかで生成され、経済状況によって多様性を帯びるのである。

ただしここで、構成員全員が世帯維持を志向するという協同的紐帯のみによって結び付けられているわけではないことも指摘する必要がある。世帯戦略を把握する際には、構成員の集合的・協調的な行動が想起される懸念があるが<sup>14)</sup>、世帯とは利他主義や慈悲深い愛情が溢れる場ではなく、構成員による協同的な選択行動のみを前提とすることはできない [Clay 1991; Wolf 1991, 1992]。個人的な嗜好、動機もまた、個人を突き動かすからであり、生計維持を志向した世帯戦略に統合されない行為も、世帯内部に存在するからである。個々人の観光との関わ

りにおいては、観光者との接触が従事者にとっての魅力となっている場合があり、この個人的な欲求が人々を観光へ向ける要因ともなっている。パリにおいて、ホテルの仕事を選択することも、個人的な動機が強いことも否めない。未婚者は、自分自身のためだけに収入を費やすことも当然あるだろう。このように、世帯の構成員は、独自の社会的地位を持つ行為者である。世帯で行なわれる意志決定過程に関しても、全会一致や公平であることを含意しない。さらに、世帯主である男性が、意思決定を一手に引き受けるとはいえない。公的領域の意思決定者は男性であっても、私的領域の世帯では女性が力を持つ場合も多々あるであろう。いずれにせよ、世帯という単位が意思決定を行なうのではなく、世帯内部の権力関係のなかで、誰かによって意思決定や選択が為されるのが重要なのである [Wolf 1991]。

世帯戦略とは、一定の市場に適応するため構成員のなかで組み立てられる生計戦略として捉えられる。そこでは経済合理性のみで意思決定や選択が行われるわけではなく、世帯の経済的／社会的再生産という目的に基づいており、その目的に合致した選択を組み合わせることで形成される。世帯内部の労働者とその労働者に依存する構成員の関係が、世帯内における労働強度を決定する重要な要素となり [Chayanov 1923]、そして世帯内の個々人の役割を位置づける。つまり、世帯内の個人の役割は、性別、既婚／未婚、年齢などの要素のみならず、構成員との関係、経済状況などの所与の条件、世帯の規模や世帯のサイクルに応じて動的に変容し、多様な意味合いを持つのである。パリにおいて、観光と関わる地域住民の世

帯戦略は、日常生活の基盤としての慣習村、パンジャールや慣習組織の活動、宗教活動との折り合いの上に成り立っており、地域社会における社会関係の再生産とも連動している。ここで世帯とは、「特定の居住に結びつくことで、生計戦略を立てる紐帯を持つ社会関係」として把握できるのであり、「より広い社会関係が維持される過程のもとで形成される、パターン化された関係」なのである [Davidson 1991]<sup>49</sup>。

## 6. 結び

本稿は、観光とジェンダーをめぐる諸議論をふまえ、ホスト社会にとっての観光を、パリを取り上げ、世帯戦略という視点から検討してきた。観光は、地域住民の現金収入の機会を拡大しただけではなく、文化観光政策や慣習組織政策と相まって、人々の社会生活とも密接に関わりを持ってきた。パリにおいては、慣習的な活動が生活の維持には欠かせない要素であるため、そのような活動を通じて再生産される社会関係は確固たる関係である。つまり、その関係は、世帯を基盤的単位として維持されるため、世帯は、地域の社会関係の再生産という意味でも重要な位置づけを持つのである。

パリにおける個々人の選択行動は、家族生活に多かれ少なかれ結びついている。地域住民は、生活を維持する上で、経済的利益だけではなく宗教活動も加味し観光と関わりを持っている。パリの人々の経済活動は、宗教などの社会的要素とも不可分といえ、世帯における日常生活の維持が、個人の意思決定や選択にとって、大きな要素となっている。世帯において生計を立てること、つまり世帯戦略は、経済合理性に還元して捉えることはできない。女性の選択行

動は、経済的利益を追いながらも、経済的効用の最大化ばかりを追求するのではなく、リスクを分散しながら世帯を維持する柔軟性を持つといえる。ここでは、世帯の維持は、経済的再生産のみならず、社会的再生産も含んでいる。本稿で示したように、経済的利益と、観光の仕事に対するプレステージとのバランスは、世帯維持が個々の世帯でいかに行なわれているかにより異なる。このように、個人の意思決定や選択には、世帯内部の構成員との関係のなかで生成される、世帯の経済的／社会的再生産という要素が深く関わっているのである。観光と地域住民の関わりにおいては、その選択行動がいかに方向づけられているのかが重要な点なのであり、個人の選択行動を世帯の論理のなかで考慮する必要があるだろう。

本稿では、観光と地域住民の関わりを、女性の職業選択に重点を置いて論じてきたが、男性の職業選択も含めた上で、世帯戦略をさらに検討する必要があるであろう。この点に関しては、別稿の課題としたい。

〔投稿受理日2004.11.25／掲載決定日2004.12.2〕

#### 注

- (1) 観光者数及びホテル数の統計は、バリ州政府統計局 (BPS: Statistic of Bali Province) による (<http://www.bali.bps.go.id/>)。
- (2) 例えば、観光芸能として現在も上演され続けているケチャは、ドイツ人画家のヴォルター・シュピース (1895-1942) の出会で生み出されたものである。ヴォルター・シュピースは「イメージ生成プロセスの大事な媒介」であり、バリ人との交流も深かったため広く影響を与えたといわれる [Vickers 1989]。
- (3) 文化観光のみならず、マリンスポーツも、現在も重要な観光アトラクションであり続けている。

自然資源は重要な観光資源だが、南部では環境の悪化により商品価値の低下が危惧されている。特に海岸部の環境悪化は、水質の悪化、浸食による建物への影響のみならず、観光資源の喪失を意味し、このことは観光の長期的発展を大いに左右する。南部への開発の集中は、観光がもたらす経済的恩恵もこの地域に集中させたが、同時に人口増加、移民、観光者の出す廃棄物処理、環境の悪化などの諸問題が生じている。これら諸問題や矛盾を孕みながら、現在は資源を枯渇させない持続的観光開発が目指されている。開発の偏りによる地域格差は依然として広いが、1980年代後半からこの地域格差を是正する開発計画が採られている。

- (4) 慣習振興政策とバリ社会に関する議論は、州政府「慣習組織コンテスト」に関する鏡味の人類学的研究に詳しい [鏡味 2000]。
- (5) バンジャールの集会所 (Bale Banjar) の修復、道路の補修などもバンジャールで行なう仕事の一つでもある。また、バンジャールの共有耕作地を売却し中古バスを購入し、主要な街へとつながる交通を整えたところもある [中谷 2001]。そのバスの運行からの収益で小学校を建設し、教師の給料もそこから捻出したという。また、観光地にはほど近いバンジャールにおいては、観光芸能として有名なケチャを上演するSekeを結成し、観光者相手の公演を行なったり、観光者への Art Market を運営したりしているところもある [Wall & Long 1995]。
- (6) バリは古くから隣ジャワとの関わりが深い。8, 9世紀にジャワの中部で栄えたシャイレンドラ王朝、マタラム王朝からの影響を受けていたとされるが、14世紀以前のバリの歴史は現在でも碑文からの推測の域を出ず、明らかではない [嘉原 1994]。15世紀末イスラム勢力によりヒンドゥー王国マジャパイトの力が弱まるにつれて、マジャパイトの貴族や僧侶がバリに逃げ込んだと考えられており、この末裔がバリ＝ヒンドゥー文化の根幹を形成するのに役割を果たしたとも考えられている。
- (7) ①神々の儀礼 (Dewa-Yadnya) : 寺院に降臨する神々のための祭り。オダランやガルガン、クニンガンなどが210日周期に行なわれる。②祖霊・死霊の儀礼 (Patra-Yadnya) : 死者を崇拝さ

れる祖霊神へと昇格させるための一連の葬送儀礼など。③人間の儀礼 (Manusa-Yadnya) : 人間の通過儀礼。主に、妊娠6ヶ月、出産直後から生後にかけて、削歯儀礼、結婚式などがある [高橋1994]。④就任式 (Rsi-Yadnya) : 祭司になるための加入儀礼。⑤悪霊の儀礼/祓い (浄化の儀礼) (Bhuta-Yadnya) : 浄化のための儀礼。いかなる儀礼を行なう前にも悪霊への供物を欠かすことはなく、一連の儀礼を首尾よく行なう準備として悪霊の儀礼が必要である。「供物が地下界の悪霊に捧げられ、土地の浄化が行なわれる」 [中村1994]。

- (8) 一般に慣習村には、総称してカヤンガン・ティガ (Kahyangan Tiga) と呼ばれる3つの寺院が祀られている。また、カヤンガン・ティガとは別に、各屋敷地にも寺院がある。平民層の場合はサンガー (Sanggah)、貴族層の場合はムラジャン (Mrajan) といわれる。その他、スパック単位の寺院や、全島に渡って崇拝される寺院もある。
- (9) これは恋愛の上に成立し、駆け落ちとは名ばかりである。婚姻の儀礼を滞りなく行なうためには莫大な資金が必要となるため、経済的状況から、一連の儀礼を簡略化するために駆け落ち婚が多いと考えられている。カースト間の婚姻に関しては、それぞれ属するカスタ内での婚姻が望ましいとされているものの、禁忌はそれほど厳しくはない。低いカスタの男性が自分より高いカスタの女性と結婚する「下降婚」は避けられる傾向が強いが、低いカスタの女性が自分より高いカスタの男性と結婚する「上昇婚」はさほど問題とはならない。下降婚も上昇婚も、妻が夫のカスタに属することになる。
- (10) 居住空間を居有していなくても、家計を一部分でも共有し、仕送りなどにより家計を補助している場合もあり、家計を重複的に捉えることもできる。本稿では、宗教的義務を担う単位を世帯と捉えているので、居住空間を共有しており、同一の義務を担う集団に属する慣習組織に結びついた場合を、世帯の構成員として扱う。
- (11) 観光の発展に伴い観光関連の労働人口は、1971年の71,000人であったが、1990年には21万1000人と増大している [中村1998]。
- (12) 調査対象の概要は、4つのカテゴリー各60名。

その60名のうちクタ、サヌール各30名ずつ、合計240名のアンケート調査を実施。全体では、男性66%に対し女性34%、バリ人72%に対しバリ人以外28%である。

- (13) インドネシア周辺の東南アジアの女性は、古くから経済的な自律性をもって生活し、戦略的に自らの生活を築いてきた [Papanek & Schwede 1988; Reid 1988]。バリにおいても、女性の経済活動は多岐に渡る。農業生産、織物や工芸品の生産や、建設現場、道路建設にも女性の姿が見られ、相当の力仕事も引き受ける。その大多数が農業従事者である。1971年における女性の農業従事者は10,700人であったが、1990年には387,700人と増加している。観光の成長に伴い、貿易/ホテル/レストラン部門では59,802人から145,200人へ、手工芸部門では19,700人から93,000人へと、女性の労働人口も増加傾向にある [Cukier 1996]。
- (14) 例えば、1960年代中頃に登場したG.ベッカーの「新家庭経済学 (New Household Economy)」では、慈悲深い独裁者という男性世帯主の存在を想定し、その世帯主による合理的選択が行なわれており、そのため男性は市場で利己的に、女性は世帯で利他的に行動することが合理的であると仮定した。この論は後に、合理的経済人を世帯内部に適応させようとしたにすぎず、実際の世帯内部を捉えていないと、フェミニスト経済学などから批判されることになるのだが、それまで顧みられることのなかった世帯内部の「ブラックボックス」を開けたという点で、重要な前史と位置づけられよう。
- (15) ここでは、個人と社会を緩衝する分析単位として世帯を捉えることが有益である。バリにおいては、個人の行為は、緩衝としての世帯を通じて社会に連結しているとも言えよう。一方で世帯のあり方も、個人や社会に応じて動的に形成される。居住単位としての世帯は、家族関係に沿って組織されることが多い。しかし一般的には、現在ではルームシェアなどの形態で居住単位を形成することがあり、必ずしも家族関係に沿って組織されるとはいえない。このような場合は居住を共にしていても、家計は共有していない。このように世帯がいかに組織されるかは、社会の影響があ

る。バリにおいて、女性の一人暮らしが少ないのも社会の影響があるからである。よって世帯とは動態的な定義が妥当であると考え。明確な定義を確立することが本稿の目的ではない。

#### 参考文献

- Apostolopoulos, Yorghos, Sevil Sonmez & Dalen J. Timothy (2001) *Women as Producers and Consumers of Tourism in Developing Regions*, Praeger.
- Chayanov, Aleksandr (1923) *Die Lehre von der bauerlichen Wirtschaft. Versuch einer Theorie der Familienwirtschaft im Landbau*, Berlin: Paul Parey. (磯邊秀俊・杉野忠夫訳, 『小農経済の原理』, 大明堂, 1957年.)
- Clay, Daniel (1991) "Introduction: Researching Household Strategies", Clay, D. (eds.), *Household Strategies* (Research in Rural Sociology and Development; v.5), JAI Press, P. 1-10.
- Cohen, Eric (1999) "Toward an Agenda for Tourism Research in Southeast Asia", *Asia Pacific Journal of Tourism Research* 4 (2), P. 79-89.
- Cukier, Judith (1996) *Tourism Employment in Developing Countries: Analyzing an Alternative to Traditional Employment in Bali, Indonesia*, Ph.D. Dissertation, Canada: University of Waterloo.
- Davidson, Andrew (1991) "Rethinking Household Livelihood Strategies", Clay, D. (eds.), *Household Strategies* (Research in Rural Sociology and Development; v.5), JAI Press, P. 11-28.
- 石森秀三・安福恵美子編 (2003) 『観光とジェンダー』, 国立民族学博物館。
- 鏡味治也 (2000) 『政策文化の人類学 —せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民—』, 世界思想社。
- Kinnarid, Vivian, Uma Kothari & Derek Hall (1994) "Tourism: Gender Perspectives", Vivian Kinnarid, D & Hall, D (eds.), *Tourism: A Gender Analysis*, John Wiley & Sons Ltd, P. 1-34.
- Long, Veronica & Sara Kindon (1997) "Gender and Tourism Development in Balinese Villages", Sinclair, T. (ed.), *Gender, Work, & Tourism*, Routledge, P. 91-119.
- 永渕康之 (1996) 「観光=植民地主義のたくらみ」, 山下晋司編, 『観光人類学』, 新曜社, P. 35-44.
- (1998) 『バリ島』, 講談社現代新書。
- 中村潔 (1990) 「『バリ化』について」, 『社会人類学年報』 16, P. 179-191.
- (1994) 「バリの儀礼と共同体」, 吉田禎吾監修, 河野亮仙・中村潔編, 『神々の島バリ —バリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能—』, 春秋社, P. 33-58.
- (1998) 「バリにおける「開発」と「文化」をめぐる言説戦略」, 『「差異」の商品化と地域アイデンティティ —地域文化形成における観光開発の位置づけについて—』, 平成7年度~平成9年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書, 研究代表者中村潔, 新潟大学人文学部。
- 中谷文美 (1997) "Private or Public?: Defining Female Roles in the Balinese Ritual Domain", 『東南アジア研究』 34(4), P. 722-740.
- (2001) 「バリ地域社会の内発的ダイナミズム」, 西川潤編, 『アジアの内発的発展』, 藤原書店, P. 231-254.
- (2003) 『「女の仕事」のエスノグラフィ —バリの布・儀礼・ジェンダー—』, 世界思想社。
- Norris, Joanne (1994) *Gender and Tourism in Rural Bali: Case Study of Kedewatan Village*, University of Guelph.
- Papanek, Hanna & Laurel Schwede (1988) "Women Are Good with Money: Earning and Managing in an Indonesian City", Dwyer, D & Judith Bruce (eds.), *A Home Divided: Women and Income in the Third World*, Stanford University Press, P. 71-98.
- Picard, Michel (1996) *Bali: Cultural Tourism and Touristic Culture*, Singapore: Archipelago Press.
- Reid, Anthony (1988) *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680 Vol.1: The Lands Below the Winds*, Yale University Press. (平野秀秋・田中優子訳, 『大航海時代の東南アジア 1450-1680年 I: 貿易風の下で』, 法政大学出版社, 1997年.)
- Sinclair, Thea (ed.) (1997) *Gender, Work, & Tourism*, Routledge.
- Stonza, Amanda (2001) "Anthropology of Tourism: Forging New Ground for Ecotourism and other Alternatives", *Annual Review of Anthropology* 30, P. 261-283.
- Swain, Margaret (1995) "Gender in Tourism", *Annals*

- of Tourism Research* 22 (2), P. 247-266.
- 高橋明 (1994) 「死の儀礼」, 吉田禎吾監修, 河野亮仙・中村潔編, 『神々の島バリ —バリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能—』, 春秋社, P. 193-226.
- Vickers, Adrian (1989) *BALI A Paradise Created*, Ringwood: Penguin Books Australia Ltd., (中谷文美訳『演出された「楽園」—バリ島の光と影—』, 新曜社, 2000年.)
- Wall, Geoffrey & Veronica Long (1995) "Small-Scale Tourism Development in Bali", Conlon, M & Baum, T (eds.), *Island Tourism: Management Principles and Practice*, John Wiley & Sons Ltd., P. 237-257.
- Wolf, Diane L (1991) "Does Father Know Best? —A Feminist Critique of Household Strategy Research—", Clay, D. (eds.), *Household Strategies* (Research in Rural Sociology and Development; v.5), JAI Press, P. 29-44.
- (1992) *Factory Daughters: Gender, Household Dynamics, and Rural Industrialization in Java*, University of California Press.
- 山下晋司 (1997) 「観光開発と地域的アイデンティティの創出 —インドネシア・バリの事例から—」, 『岩波講座 開発と文化 3 : 反開発の思想』, 岩波書店, P. 107-124.
- 嘉原優子 (1996) 「バリ島の概観」, 吉田禎吾監修, 河野亮仙・中村潔編, 『神々の島バリ バリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能』, 春秋社, P. 13-32.